通信第８５号　わかっちゃいけんのよ

　三月は強行日程で移動も沢山あり「気が付いたら過ぎていた」という感じです。通信を書かせて頂く時間がとれませんでした。

　この度は途中で一度寺に帰る予定でしたが住職（江本真人）の「続けた方が時間的にも運賃も安くなるよ」という助言で五日から十一日まで連続での日程となりました。三日に宇佐市の渡辺和義師宅本願道場。五日に発ち、六日の富山県南砺市にある城端別院での本願道場。この日から新潟県の渡辺義彦さんが十一日まで同行してくださいました。七日、妙敬寺（立野奈津子坊守）臨時法座。移動して、福井駅前のホテルに泊まる。八日、吉崎御坊参詣。小高い丘に高村光雲作の大きな素晴らしい蓮如上人の像が立っておられ、えて頂いた感じがしました。信仰の熱は衰えたとはいえ地域に蓮如上人のお徳が顕れていました。上人のお像の近くで一心に掃除をしておられた方がにご案内して下さいました。八十過ぎのボランティアとしてはたらいている彼はずいぶん夜遊びをして来たそうですが、コロナがきっかけで一念発起して掃除をはじめたそうです。「蓮如上人のお陰で命びろいをした」と言われました。明るい清々しいお顔をされていました。

それから福井駅に戻り、近くの店でさんご夫妻と昼食、寺にゆき岩佐幸子さんが加わり座談。ホテルにもう一泊。九日、金沢駅にて野崎昇賢さんと合流して先生の明達寺へ参拝。（清澤満之先生を拝しておられる暁烏先生の後ろ姿の座像あり）、にされた記念館にて先生の揮毫された「帰命無量寿如来　南無不可思議光」の広く自由ないに触れ、先生の本質に触れた感じがしました。テーブルに置いてあった（自身の願いをはっきり知りなさい、自分自身を知りなさい）の本を渡辺さんが記念に購入されました。私も『浄土に生きる』を求めました。帰寺して気になったのでやはり『汝自当知』と『仏教の神髄』を注文すると坊守さんが手紙と共に送って下さいました。この本は今後の私に大きく影響していく予感がいたします。

　その日は岐阜に移動して駅前のホテルに一泊して翌十日、昼から岐阜市芋島の田中秀法さん宅本願道場、夜は揖斐郡池田町の森はる美さん宅本願道場

　十一日、三重、松林寺（森愚英住職）本願道場夕方帰寺

　十二日、長仁寺リモート法座

十三日、少年院

　十五日、欧州リモート法座

　十六日、長仁寺彼岸法要

十七日、アメリカから三月に一時帰国しておられる、名倉幹師を迎えての彼岸法要

二十一日、輪読

二十二日、宇佐市、福圓寺（報恩講、彼岸会）、四時から長仁寺リモート法座。

二十三日、福圓寺（報恩講、彼岸会）

二十七日、聞光道

二十九日、新潟県、圓性寺（林康一朗住職）での座談

三十日、明岸寺結婚式（司婚、媒酌人、法話の役）

四月二日、長仁寺リモート法座

三日、岐阜田中本願道場、森本願道場

四日、三重、松林寺本願道場

見ていると私自身でも強行スケジュールに驚かされます。その間に追い詰められたからこそ、如来さまは私の外から事件が起きた時、「ここをおまえはどうする」「どうもしません。あなたにおまかせです」「そうか、じゃあこうしたらどうか」と、見て下さり、助けてくれました。中からも一つと成られてはたらかれ、演台に立った時、不思議に落ち着かされました。下からは力が湧き出て下さるという連続でした。

三十代の時、東京の先生と清沢満之先生の西方寺をお訪ねした時、生意気にも皆さんが清沢先生をり上げすぎている気がしたので「清沢先生あっての如来さまですか、如来さまあっての清沢先生ですか」と質問をしました。あとで「あの質問は評判が悪かった」とお聞きしました。当時の私自身がそのことに確信が持てていなかったのでそのせいもあったのでしょう。今ははっきりと「如来様あっての自身である」と申し上げられます。そこを通らせて頂くと「自分あっての如来様も成り立ちます」決して順番が逆ではありません。二種深信も機の深信が先であります。

深心と言うはすなわちこれ深信の心なり。また二種あり

一つにはして「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、よりこの　常にし常に流転して（娑　婆、思いから離れる）の縁あることなし」と深信すべし。（お釈迦様は無明の闇とおおせられています）

二つには決定して「の阿弥陀仏の四十八願、衆生をしたまう、疑いなく、なく彼の願力に乗ずればんで往生を得」と深信せよとなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　愚禿鈔

自力で機の深信を理解しても明るくなりません。人間の思想ですから。先生が「念仏（如来様）を離れたら生きていけない自分に遇いなさい」と申されたことがうなずけてきます。曾我量深先生は「如来我と成りて我を救い給う、されど我は如来に非ず」と申されています。されないと味わえない世界でありましょう。

全日程を終えてふりかえってみますと、城端別院ではＴさんが「わかったこと、知っている事、聞いてきたこと全部離せということですね」と言われ一瞬にこっと笑われました。聞いて来た甲斐があったという慶びを共有しました。

法隆さんの明岸寺の本堂での披露宴では六十人以上の方々の活気が本堂に満ち溢れていました。「本願ですね。今日はいい話を聞いた」とビールをぎに来てくれた方などがおられました。宴のはじまる前、私に十五分間の法話の時間を与えられました。その時「大無量寿経」は真実の経である。本願が説かれ南無阿弥陀仏をすすめて下さっている事などを申し上げました。誓いの言葉、最後のお礼の挨拶の中で、「念仏から始めたい、本当にお念仏を頂きたい」というお言葉を聞き、安心しました。寺に生きた聞法会が開かれ、地道に歩んでゆかれることをに願っています。

次の日の朝早く林さんから電話がありました。「一軒月忌を済ませてからそちらへ行ってもいいですか」「もちろんです。待っています」林さんが、姿でホテルに来られました。渡辺さんの部屋で一時間位座談して、チェックアウトの十時までロビーでの座談でした。ホテルの人達はそっとしておいてくれました。林さんを見ていると若い頃の私の姿と重なります。何か知らんけれども生きた聞法の方に身体が動かされるのです。雪の中を走って藤谷秀道先生の草庵に通いました。駅まで歩いて移動すると法隆さんもこられていました。三人のお見送りをうけて帰寺いたしました。

四月の三重、松林寺（森愚英住職）でのご縁は強烈でした。昨年の十二月の報恩講でちょっとしたトラブルが重なりましたが過ぎてみれば如来さまのお計らいでした。事件が菩提に転じられました。「すべてこちらからだった、勉強してきたことなどを振りかざして、上から門徒、同行さんたちを何とかしよう。何でわからんのかと見下していた。ついていたがとれた感じがする」と、それを言った時の顔が十才若返ったように見えて驚きました。これからじわじわと変わられると確信しました。寺の雰囲気も変わってゆくでありましょう。私自身がその通りであるからです。

如より来生されるおはたらきが信じられなければ、すべてが自力のこちらからの世界です。ご恩とか感謝とかは感じられず、イライラしたり、りしたり、不平不満、不安いっぱいです。落ち着きません。そして上から目線の高上りの姿勢です。人は逃げていきます。

「大無量寿経」にある第十八願に上巻に

　たとい我、仏を得んに、十方衆生、心をしして我が国に生れんとうて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覚を取らじ。五逆と正法を誹謗せんをば除く。

下巻の十八願成就文にも、唯除、五逆誹謗正法の文があります。長い間どうして五逆誹謗正法の文が消えていないのか。本願が届いたなら、五逆の在り方が消えるはずではないかと疑問に思っていました。この頃、上巻の五逆誹謗正法はの人の上に見ていないか。自分は聞法している周りの人は聞法していない。と上から目線で接っしている。私がそういう有り方でした。今でもそういう有り方をしている自分が見せられます。

下巻はに自分を照らされる仏智のご廻向の世界です。「まてよ、自分は法に逆らっていないか。生活の中で自分の思い、考え、勉強してきたことを信じ優先して如来さまは後回し、いつも忘れている。このような自力の在り方が見せられてきます。聞く者の代表者として聞いているのか。背く者、聞かないものの代表者として聞かせて頂くのか。もう一つ具体的には法（本願）でしか、絶対に頭が下がらない、死んでも頭が下がらない者の代表者として聞かせて頂くのか。ここに帰らせていただくことで私は和らかくならされます。

四月六日の朝のお勤めのとき大石先生のお教えを新たにいただきました。

　　仏様のご本願は人間の考えを超えたものなのです。人間の意識で教義を覚えて、頭でいくら整理してみても、得たものはこの世のことで、人間を超えてはおりません。「要するに人間、凡夫には仏様の願いを受けとる力もないのです」

　　　仏様のご本願は、人間の考えとは出所が全然異なるのです。その出所の根本を「実相」とか「涅槃」、「寂滅」いろいろ申されますが、親鸞聖人は「色もなし形もましまさず、れば心もおよばず、もたえたり」と注釈して下さっておられます。まことに、色がないなら眼で見ることはできない。五感で受けとれないのなら、心で知情意で受けとれるのか。「心もおよばず」。手出しができない。それなら絶望か。

「実相」という仏智は、抽象的な真理というものではありません。と申しますのは、気づいてみれば、お互いは実相という仏様の広大なお心の中に住んでいるのです。ですけれども、それに気づかない。唯、無駄な苦しみをくり返して一生を終わってゆく私達を見るにしのびず、何とか親のおることを知らせてやりたい、いや、親と同じ身、同じ徳もっていることを知らせてやりたいという願いをもって、実相身から種々様々な姿を現わして活動をされる姿を「」と仰せられるのです。「物」とは「衆生」のことです。衆生のの身と仰せられるのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　書信４８の８

人の幸せを願う心など私にはかけらもありません。その私に如来さまが願いをかけられ、ついに抱き取ら

れ同じ徳を与えて使って下さるのです。藤解先生は「如来のものにしていただく」とおおせられています。

仏の願いがよりどころになり、願いに生きる者は無上のであります。

四月六日の新聞に国連発表の「世界幸福度ランキング」（２０２５年）に日本の幸福度は１４７か国の中で５５位とあります。先進７か国の中でも最低です。世界の人が日本に憧れ、観光に来られています。物価が安い、治安の良さ、おいしい食べ物、交通面での正確で便利がよいところ。すばらしい建物。数えたらきりがないほどです。衣食住では世界のトップクラスの中に在ってなぜ幸福感がないのでしょうか。まるで金持ちの人が文句ばかり言って駄々をこねているようなことです。その深くに宗教の問題が関係していると私には思われてなりません。

寺離れ、宗教法人が売りに出されているというドキュメンタリーのテレビも最近ありました。私は僧侶の方とは聞法のご縁が無いとわかれば距離を置いて歩んできました。対抗するような気持もありました。これからもその傾向はありましょうが、こういう時代のタイミングに暁烏先生の（広大なる世界）、皆当往生（すべてが救われている世界）の世界に触発されました。また、新たな活動がはじまります。

最後に中津市の同行さんのお便りです。

いつもいつも通信ありがとうございます。常照先生、奥様の法喜先生のご法話もいつも解らない所もありながら、ありがたく拝読させていただいております。

ほんとうに私の心の支えとなっております。私の身体が少しずつ不自由になり家の中を二本のつえで動いている状態です。主人に支えられての生活です。

こらからもお念仏をとなえつつ与えられた命を明るく過ごせる様にしたいと思います。これからも通信よろしくお願い致します。長仁寺様の活やくにブラジル、アメリカ、ウクライナ（欧州）とほんとうに世界にまでも法の旅を回られるすがたに頭がさがり驚きです。ほんとうの仏法をつたえられる姿に感動いたします。

お礼が遅くなりまして申し訳ありませんでした。これからもよろしくお願い致します。

　なむあみだ仏

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　中津市　黒川秀美

私の方が励まされ、元気づけられます。

令和七（２０２５）年四月十一日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝